



2008年  
2月9日(土)  
 ~ 4月13日(日)

# インドネシアの絣 イカツト展

織込まれた島々の伝統と造形美



## 併設展 丹波布展



一貫した手作業による伝統の  
 美と技、そしてめくもりを

主催 丹波市教育委員会、丹波市立植野記念美術館  
 協力 エンバ中国近代美術館、丹波布伝承館

開館時間 午前10時から午後5時  
 (入館は午後4時30分まで)

休館日 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)

入館料 大人300円、学生200円、小・中学生100円  
 (ココロカード利用可、20名以上団体割引)

### 丹波市立 植野記念美術館

丹波市氷上町西中 615-4 TEL0795-82-5945  
<http://edu.city.tamba.hyogo.jp/ueno/>

JR 福知山線柏原駅(又は石生駅、下車後、神姫バスで「京橋」下車すぐ、  
 舞鶴若狭自動車道春日I.C から 北近畿豊岡自動車道氷上I.C 経由、  
 氷上の信号を左折。

# インドネシアの絣 イカト展

2008年2月9日(土)  
～4月13日(日)

丹波市立植野記念美術館寄贈者 故 植野藤次郎氏指揮のもと、1978年エンバ中国近代美術館において、インドネシアの文化芸術の調査研究隊が派遣されました。本展覧会では、その時に収集されたインドネシアの染織「イカト」などを紹介します。「イカト(ikat)」という言葉は、マレー語やインドネシア語で「括る」「縛る」を意味し、今日では、「絣(かすり)」をあらわす世界共通の染色用語として使われています。

絣とは、織物のうちでは経糸(たていと)や緯糸(よこいと)を織り上げる前に染める先染織物として分類され、今日では日本、インド、インドネシアなどの国々が、世界の絣の主要な産地として知られ、中でもインドネシアは世界最大の絣の宝庫として注目されています。

長い年月にわたってつちかわれてきたインドネシアの染織技術、文様は、それぞれの地域の自然、文化、宗教などの違いから、様々な展開を見せています。バリ島、スンバ島、サウ島など地域ごとあるいは部族ごとにそれぞれ異なる伝統と芸術性によりかたちづくられたイカトの数々をお楽しみください。



絣は染織技法の上では、防染法によって色染めがおこなわれる。布を織るための糸の束を、頭の中に描かれた構図に従い、特定の部分を紐などできつく縛り、その部分に染料が浸透しないようにして糸を染め、その後、縛っていた糸をほどいて縫い上げると織物の上に文様がかたちづくられる。多くの手織りイカトは、1日に数センチしか織れず、完成までに数年はかかる。

動物文経絣腰巻(スンバ島・木綿)  
文様には身近な動物が最も多く扱われるが、人象文、幾何文やインド綿の経緯絣パトラの影響と思われる文様も見られる。



花鋸歯文縫取織腰巻  
(バリ島・絹、金糸)  
インドネシアの緯絣は、絹の使用が一般的であり、外界との交流が比較的盛んで、ヒンドゥー教・仏教文化が影響を及ぼした文化圏に限定される。



植物馬文経絣腰衣  
(サウ島・木綿)  
使用するモチーフと色、縞、紋織の構造の仕方で階級や家系の区別、姉妹までを表す。サウの藍は深く澄んでいるのが特徴である。



幾何文経緯絣胸当  
(バリ島・木綿)  
インドネシアにおいて経緯絣は、バリ島東部に位置するテンガナン村においてのみ作られ「グリンシン」とよばれている。その存在は東南アジアで唯一というきわめて特殊なものである。

協力:エンバ中国近代美術館(芦屋市)

## 併設展 丹波布展

2008年2月9日(土)～4月13日(日)

丹波布は江戸末頃から佐治地域(現在の丹波市青垣町佐治)周辺で農家によって織られ京都などへ売られていました。また、当時は縞緯(しまぬき)、佐治木綿などと呼ばれていました。

時代の流れとともに一時は衰退しましたが、昭和に入ってから民芸研究家の柳宗悦氏によって価値を見いだされ、その後、復興に関わる人々の尽力により、今日まで伝承が続けられました。世の人々の手仕事への関心、環境意識の高まりに応える布として現代にも通じる精神を持っています。

ざっくりとした風合いや素朴で温かな草木染の色合いをご覧ください。

協力:丹波布伝承館



天然の材料である木綿、絹、植物染料を用い、糸紡ぎから織りまで全て手作業によって縞(格子)模様で織ったものです。また、藍以外の茶、緑などの色合いが入っていることや、当地で盛んだった養蚕の産物である絹の「つまみ」糸を緯糸に使用していること、特徴的な縞の配列パターンなどからひと目で他地域の木綿布と区別がつくものです。